

『ギルガメシュ叙事詩』における 永遠の命と知恵

渡辺 和子

はじめに

人間の生と死をめぐる研究分野としての死生学が今後どのように展開、発展してゆくかはまだ十分に見通すことができない。しかし生と死について考える場合には現代の状況だけでなく、遠い過去をも視野に入れて考えることが極めて重要であると筆者には思われる。なぜなら人間の生と死の歴史は、人間の歴史と同じだけ長いからである。カタカナで書かれる「ターミナルケア」も「グリーフケア」も人口に膾炙しはじめている。しかしそのこと自体にある種の危機感を覚える。そのように呼ばなくとも人間は昔から営々と生と死に向き合ってきたからである。

人間はいつから自分が死すべき存在であることを知っているのかという問いには、おそらく答えがでることはないであろう。埋葬をしたという6万年前のネアンデルタール人は死すべき運命を見つめ、あるいは死後の世界について考えたかもしれない。しかしそれよりもはるか以前から、人類が自らの死を見つめていた可能性も否定できない。また死すべき存在であることを自覚すると同時に、死ぬことなく永遠に生き続けることへの願望も生じたことであろう。

ティグリス・ユーフラテス両大河の流域に興った四大文明のひとつであるメソポタミア文明において、人類最古の文字が発明されたといわれている。150年ほど前から研究者に知られるようになった古代メソポタミ

アの文書は、人間が書き残した文書のうちで最も古いものに属する。粘土板に楔形文字を用いて記す複雑できわめて整備された文字体系は、紀元前3000年頃にメソポタミア南部のシュメール人が作り出し、それをセム系のアッカド人が借用して広めたと考えられる。文書の大半を占めるのは経済文書や行政文書であるが、宗教的な内容を持つ文書、神話や叙事詩、儀礼、占い、呪術などに関するものもある。本論ではそのなかから古代メソポタミアの死生観を探るために『ギルガメシュ叙事詩』をとりあげる。¹⁾

アッカド語で伝えられた『ギルガメシュ叙事詩』はおおよそ4千年前に成立したとされている。それは確かに人類最古の長編叙事詩である。しかし前述したように人類はそれ以前から、文字を持たなくとも死や死後の世界について考え、永遠の命を求め、またそれが得られないことについて思いをめぐらせてきたはずである。したがって『ギルガメシュ叙事詩』でさえ、少なくとも数万年の人類の思惟を経て成立していると見るべきである。

I 『ギルガメシュ叙事詩』と「神話」

『ギルガメシュ叙事詩』が「神話」ではなく、一般に「叙事詩」とよばれているのは、主人公ギルガメシュのモデルとなった人物が紀元前2600年頃メソポタミア南部の都市ウルクを治めていた実在の王であり、少なくとも部分的にはその偉業を語るという内容になっているからであろう。しかし多くの神々が登場し、ギルガメシュ自身も「三分の二は神、三分の一は人間」²⁾とされているのであり、一般的には「神話」と位置づけられることも少なくない。³⁾

他方、「神話」の定義については様々な観点から論じることが可能であり、簡単に一つの結論を導き出すことはできない。それは同時に『ギルガメシュ叙事詩』とは厳密には何であるのかという問いにも簡単には答えら

れないことを意味している。諸民族の古来の神話を研究する神話学、あるいは比較神話学では概して神話の狭い定義が採用されている。その一例としては「神話とは集団や社会が神聖視する物語であり、作者は問題とならず、成立した年代は不明で—その結果—太古に成立したとされる」⁴⁾ というものがある。それに対して宗教学や深層心理学では概して神話を様々な種類の「宗教的物語」とする広い定義が採用される。⁵⁾ 作者がわかっているものでも、また現代の作品であっても宗教的な内容を持っていれば「宗教的物語」であることになる。また、あらゆる「宗教的体験談」も含まれてよい。しかしながら近年になって「宗教」、「宗教的」という言葉が何を意味し、どのように使われているかを再考する動きが学界で興っている。⁶⁾ 「神話」を「宗教的物語」とすることが適切でなければ、やや漠然としているが仮に「時空を超えて人間に強い影響力を持つ物語」、あるいはそれに類するものとしておきたい。

『ギルガメシュ叙事詩』は世界最古の神話の一つであり、たとえば「日本神話」よりもはるか以前に成立したことを考えると、狭い意味でも神話とすることに抵抗がないのであろう。しかし後述するように、『ギルガメシュ叙事詩』には作者、あるいは編者を想定することが可能なのである。

II 『ギルガメシュ叙事詩』研究の新局面

日本では、1965年に『ギルガメシュ叙事詩』の日本語訳が矢島文夫によって出版⁷⁾された。その後30年程たって1996年に月本昭男が「標準版」(後述)を中心として、それ以前の古バビロニア版、中期バビロニア版の訳をも含めた新しい日本語訳を上梓した。⁸⁾ これには中村光男によるヒッタイト語版とフリ語版の訳も含まれている。さらに月本による詳しい解説も付され、日本における『ギルガメシュ叙事詩』研究の基盤を提供するものと

なっている。

世界的な規模でみると、楔形文字文書を研究する「アッシリア学」はこれまでおよそ 130 年間、『ギルガメシュ叙事詩』研究とともに歩んできたといっても過言ではない。しかし 2003 年に A. R. ジョージが、彼自身の 16 年間の研究成果をまとめて出版した大著『バビロニアのギルガメシュ叙事詩』I-II 巻⁹⁾によって『ギルガメシュ叙事詩』研究は新たな局面を迎えている。この著書はこれまでに確認された『ギルガメシュ叙事詩』の本文断片を組み入れているばかりでなく、『ギルガメシュ叙事詩』研究の集大成ともなっている。今後しばらくはこの記念碑的著書を踏まえて、なおこれからも絶えず発見され、発表されてゆく新たな本文断片に注意を払いながら研究を進めてゆく必要がある。

III 『ギルガメシュ叙事詩』の成立

19 世紀にニネヴェ（イラク北部のクンジュク）で発見され、大英博物館にもたらされた大量の粘土板文書の中から確認された『ギルガメシュ叙事詩』の「標準版」は前 7 世紀に書写されたものである。しかし「標準版」が成立したのは前 7 世紀ではなく、前 12 世紀頃にさかのぼると推定されている。「標準版」は 12 の書板から成るが、内容的には第 11 書板で完結している。第 12 書板はいわば付録のようなものであり、第 11 書板までの内容と直接つながるものではない。「標準版」よりも古い版として、少しずつ内容が異なる古バビロニア版（前 18 世紀頃成立）、中期バビロニア版（前 14 - 13 世紀頃成立）などの複数の異なる版の存在も知られるようになった。また、ギルガメシュが登場するさらに古いシュメール語の小作品がいくつか存在することがわかってきた。¹⁰⁾そして古バビロニア版以降のアッカド語の『ギルガメシュ叙事詩』はシュメール語の小作品を取

り入れながら作られたことも明らかになった。

『ギルガメシュ叙事詩』のどの版にも作者、あるいは編者の名は明らかにされていない。しかし前7世紀に記された「文学作品のリスト」の中に「ギルガメシュの一群の書：[・・・(職名)]であるスイン・レキ・ウニニの口の(語った)もの」¹¹⁾という一節が見出されることから、少なくともこの人物が、それまでのギルガメシュが登場する作品を改訂しながら「標準版」を編んだことが推測される。¹²⁾

IV 『ギルガメシュ叙事詩』の主題をめぐる論議

『ギルガメシュ叙事詩』の内容をごく簡単に述べる。

ウルクの暴君であったギルガメシュが盟友エンキドゥを得て共に杉の森に向かい、その番人であるフンババを殺害する(第1-5書板)。ギルガメシュは女神イシュタルから求愛されるが、それを拒絶すると、イシュタルは父神である天空神アヌに「天牛」を地上へ送ることを願う。しかしギルガメシュとエンキドゥは「天牛」をも殺害してしまう。フンババと「天牛」を殺害した罰としてエンキドゥに死が宣告される。エンキドゥはこの運命を呪うが、太陽神シャマシュになだめられる(第6-7書板)。ギルガメシュはエンキドゥの死を悼み、手厚く埋葬するが(第8書板)、自分もいずれ死ぬことを恐れ、永遠の命を得たというウトナピシュティムを訪ねる旅に出る。幾多の困難を克服してギルガメシュはついにウトナピシュティムに会う(第9-10書板)。ウトナピシュティムは知恵の神エアの助けによって大洪水を免れ、永遠の命を与えられた顛末を語る。そしてギルガメシュに六日七夜眠ってはならないと言うが、ギルガメシュはすぐに寝入ってしまう。このことからギルガメシュは、自分には永遠の命を得る

ことは不可能であるとあきらめる。しかしウトナピシュティムから若返り効果のある草の存在を教えられ、ギルガメシュはそれを得て帰途に着く。ところがギルガメシュは途中でその草を蛇に奪われてしまう。蛇は脱皮し、ギルガメシュはむなしくウルクに帰還する（第11書板）。

『ギルガメシュ叙事詩』の主題が何であるかについては長らく論じられてきたが、¹³⁾ 様々な要素が幅広く取り入れられているため、主題を一つに絞ることは難しい。¹⁴⁾ しかし、ギルガメシュが親友エンキドゥを失って嘆き、自分もいずれ死ぬことを恐れて永遠の命を求めて旅をするという内容をもつ後半のほうに重点が置かれていることは確かである。

M. エリアーデは『世界宗教史』Iのなかで『ギルガメシュ叙事詩』に関する叙述に数ページをさいているが、そのなか次のように述べている。

『ギルガメシュ叙事詩』は、死の不可避性によって定義された人間的条件を劇的な仕方の説明していると考えられてきた。しかし、この世界文学の最初の傑作は、神の助けをかりなくとも、一連のイニシエーションの試練をうまく切り抜けた者には、不死性が得られるという考えをもほのめかしているとも考えられるのである。この視点からすれば、ギルガメシュの物語は、むしろ失敗したイニシエーションについての劇的説明なのである。¹⁵⁾

エリアーデは、「一連のイニシエーション」のなかで、「英雄型の試練」と「精神的次元」の試練を分けている。「英雄型の試練」としては①トンネルの旅（第9書板）、②シドゥリによる「誘惑」、③死の海の横断（第10書板）があり、ギルガメシュはこれらを乗り切ることが出来た。ところがウトナピシュティムがギルガメシュに与えた「六日七夜眠らずにいる」（第

11 書板) と言う試練は、「極度の集中力を要する精神的次元のもの」であり、ギルガメシュはこれに耐えることができなかつたとする。さらに、せつかくそのありかを教えてもらい、手に入れた若返りの植物を蛇にとられてしまったことは、ギルガメシュに「知恵」が欠けていたからだと解釈している。¹⁶⁾

エリアーデが主張するように『ギルガメシュ叙事詩』がイニシエーションに失敗したために永遠の命も若返りも手にいれられなかつたことを語っているとすれば、人間はなぜ死すべき存在か、あるいはなぜ死すべき存在となったかを語る多くの神話に並ぶものということになりそうである。¹⁷⁾しかしエリアーデは『ギルガメシュ叙事詩』を「セム語系民族の天才が生みだした作品」とし、「さまざまな独立したエピソードから、不死探求の、あるいはより正確にいうと、成功まちがいないと思われた企てが結果的には失敗したという、非常に感動的な物語が作りあげられた」と述べている。¹⁸⁾

エリアーデはギルガメシュが越えたイニシエーションの一つとして「シドゥリの誘惑」を挙げている。それは、女神シドゥリ（別称「酌婦」あるいは「酒屋の女主人」）がギルガメシュに与えた、人間には永遠の命は与えられていないのであり、人間は日常生活を楽しむべきであるという古バビロニア版だけに含まれる忠告¹⁹⁾を「誘惑」と解釈しているためであろう。この解釈はエリアーデだけのものではないが²⁰⁾、ここではその解釈の当否についてだけでなくシドゥリの忠告の内容についての論議には立ち入らない。いずれにしてもギルガメシュは親友エンキドゥの死を悲しむあまり、シドゥリの忠告には耳を貸さない。しかしシドゥリはギルガメシュに、ウトナピシュティムのところへ到達するためにはどうしても会わなければならない渡し守ウルシャナビ（古バビロニア版ではスルスナブ）の存在を教えている。²¹⁾

『ギルガメシュ叙事詩』の解釈者のなかには、ギルガメシュの成長過程を読みとる者が少なくない。近年ではユング心理学の立場からシェルフ＝クルーガーが、ギルガメシュの「個性化過程」を描き出したものが『ギルガメシュ叙事詩』であると論じた。²²⁾

月本は、シェルフ＝クルーガーに触発されてギルガメシュの「精神遍歴」についても考察している。月本は冒頭部分の「彼は遙かな道のりを歩んできて疲れたが、やすらぎを得た」、²³⁾「ギルガメシュが歩んだあらゆる苦難」²⁴⁾という編者の言葉に着目する。そして「『生命』探求の旅からギルガメシュが得たものは、新しい人生観でも日常性への回帰でもなかった。彼が残したものは『生と死の〔秘密〕』を求めて『労苦を重ね』、『あらゆる苦難の道を歩んだ』という事実なのであり、その事実が、ただそれのみが、ギルガメシュをギルガメシュたらしめた」ことを述べていると解釈している。²⁵⁾

V 「洪水神話」と『ギルガメシュ叙事詩』

前述したように『ギルガメシュ叙事詩』はそれまでにメソポタミアで伝承されてきたギルガメシュにまつわるいくつかの作品を編纂、改訂して形成された。しかしこの叙事詩の主題や編者の意図を問うときに、特に重要な鍵となるのは第11書板に挿入された「洪水神話」なのではないかと筆者は考えている。

『ギルガメシュ叙事詩』発見のきっかけとなったのは、1872年に大英博物館のG. スミスによって『旧約聖書』の「ノアの洪水伝承」（「創世記」6－9章）と非常に似た内容をもつアッカド語文書が認められたことであつた。後にそれが『ギルガメシュ叙事詩』「標準版」の第11書板であることが判明した。²⁶⁾ ここではウトナピシュティムの口に「洪水神話」の

後半部分、(前半の創成神話は除く)が置かれ、どのようにして洪水を逃れ、永遠の命を与えられたがギルガメシュに語られる。しかしこの「洪水神話」の部分は『ギルガメシュ叙事詩』のなかでは明らかに「挿話」であり、アッカド語の「洪水神話」である『アトラ・ハシース』²⁷⁾と、またそれよりも古く成立したと考えられるシュメール語の「洪水神話」のそれぞれ後半部分に直接的、間接的に依拠していることが認められている。

シュメール語の「洪水神話」は全体の三分の二以上が失われているが、次のような内容が読み取れる。神々(天空神アン、大気神エンリル、知恵と水の神エンキ、母神ニンフルサグ)は人間と動物を創造し、最初の五都市を建設するが、洪水を起こすことを決定する。神々の集会で誓いあって決定された洪水は変更できないものであった。そのため知恵の神エンキ(アッカド語ではエア)は、王であり祭司であったジウドスラに直接ではなく、暗に「壁よ、・・・」とジウドスラの傍らの壁に語りかけて洪水が起こることを知らせる。その指示に従って船に乗り込んで七日七夜続いた洪水を免れたジウドスラは、人類と動物の種を救ったことから、アンとエンリルによって「神のような命」を与えられて東方のディルムンの地に住まわせられた。²⁸⁾

『アトラ・ハシース』は『ギルガメシュ叙事詩』と同様に、シュメール語の「洪水神話」を取り入れながら作られた古バビロニア版、中期バビロニア版、そして前7世紀の写しによって残るアッシリア版が知られている。版によって多少異なるが、次のような内容をもつ。まず神々が人間を創造してそれまで神々自身が担ってきた労働を人間に肩代わりさせる。しかし人間が増えすぎて騒々しくなったため、神々は洪水をおこして人間を滅ぼすことを決める。しかし知恵の神エアは「レンガの壁よ、聞け。葦の垣根よ、私のすべての言葉を守れ」²⁹⁾と人間の一人であるアトラ・ハシース(「大いなる知恵者」の意味)に暗に語りかけ、船を作るように命じた。船に乗

り込んだアトラ・ハシースの家族の一族と様々な動物は洪水を生き延びることができた。ただしテキストの欠損があるため、現在確認できる範囲ではアトラ・ハシースに永遠の命が与えられたという記述は認められていない。ちなみにメソポタミアの「洪水神話」の影響を受けたと考えられる『旧約聖書』の「ノアの洪水伝承」の場合は、「ノアは、洪水の後三百五十年生きた。ノアは九百五十歳になって死んだ」（「創世記」9章28－29節）とされている。いずれにしても『ギルガメシュ叙事詩』において問われるべき要点の一つは、編者はどのような意図をもって「洪水神話」を組み込んだのかということではないだろうか。

VI ギルガメシュとウトナピシュティム

死をも恐れぬ冒険をしていたギルガメシュが、親友エンキドゥの死によって、いわゆる「汝の死」³⁰⁾を体験することになる。ギルガメシュは友の死をいたく嘆くだけでなく、自分も死すべき存在であることを思っ愕然とし、自分自身の死を逃れる術を手に入れたいと願う。そして太古の大洪水による死を免れて、永遠の命を得たウトナピシュティムに会うために、難関を乗り越えたギルガメシュは、ウトナピシュティムと次のような会話を交わす。

「どのようにしてあなたは神々の集いに立ち、(永遠の)命を探し当てたのですか。」ウトナピシュティムはギルガメシュに言った。「ギルガメシュよ、隠されている事をお前に明かそう。神々の秘密をお前に語ろう。」³¹⁾

このあとに「洪水神話」が続く。エンリルをはじめとする神々が人間を

滅ぼすために起こした洪水が引いたあと、ウトナピシュティムが洪水を生き延びたことを知ってエンリルは怒る。しかしエアになだめられ、洪水を起こすべきではなかったと諭される。そしてエンリルはウトナピシュティムに「これまでウトナピシュティムは人間であったが、いまやウトナピシュティムと彼の妻は、われわれ神々のようになる。ウトナピシュティムは遙か遠くの河口に住むように」と告げるそして「こうして彼ら（神々）は私（ウトナピシュティム）をつれて行き、遙か遠くの河口に住ませた」と言う言葉で締めくくっている。³²⁾

この「洪水神話」のすぐ後で、ウトナピシュティムはギルガメシュに次のように言う。

「だが今は、お前が捜し求める命を見出すために、誰がお前のために神々を集わせるだろうか。さあ、六日七夜、お前は眠ってはならない。」³³⁾

確かにギルガメシュはこの試練に耐えられず、その結果永遠の命をあきらめた。しかしエリアーデ（前述）³⁴⁾が考えるように、試練さえ乗り切れば永遠の命は手に入ったのであろうか。おそらくそうではなく、たとえギルガメシュが七夜眠らずにいられたとしても、永遠の命は得られなかったと思われる。なぜならウトナピシュティムはこの課題を与える前に、「今」はギルガメシュに永遠の命を得させるために神々を集わせる者はいないと言っているからである。それでもウトナピシュティムがこの課題を与えた理由は、ギルガメシュ自身が認めたように「眠り」はいわば「死の隠喩」であり、それによって死が逃れがたいものであると悟るためであるかもしれない。³⁵⁾あるいは、現在も様々な宗教的修行の中に見られるように、長い間眠らずにいることによって通常の間を越えた存在になることを目指

してみよ、またそれによって死の恐怖に打ち勝つ何かを得よという勧めであったのかもしれない。³⁶⁾

Ⅶ 「知恵文学」としての『ギルガメシュ叙事詩』

前述したようにエリアーデは「精神的次元」のイニシエーションを乗り越えられなかったこと、さらに若返りの植物を蛇にとられてしまったことにギルガメシュの「知恵」の欠如を見ている。確かにウトナピシュティムは知恵があるために、さらには知恵の神エアの援助によって「精神的次元」のイニシエーションに耐え、永遠の命を得ることができたとも考えられる。しかしエリアーデがいうように勇気を振りしぼって、あるいは体力を使って乗り越える試練と、集中力、あるいは知恵を使って乗り越える試練とは、それほど異なるものであろうか。ギルガメシュはエンキドゥが死んで「六日七夜、彼のために泣いた」³⁷⁾という。そしてギルガメシュが旅に出たのも、親友エンキドゥの死を目の当たりにして初めて自分の死すべき存在であることを恐れ、永遠の命を得たというウトナピシュティム訪ねるためであった。そして太陽（神）だけが通る門にたどりついて、「死の形相」をもつ門番サソリ人間との問答の末、通過を許される。ギルガメシュは十分に「精神的次元」のイニシエーションも克服してきたのではないか。³⁸⁾ 確かにギルガメシュは六日七夜眠らずにいることはできなかったが、その後に死は逃れがたいものだと観念する。このような過程の全体を見るならば、ギルガメシュは次第に「知恵」を獲得していったと見ることができるのではないか。

事実、『ギルガメシュ叙事詩』の編者はギルガメシュを「知恵」に欠けたものとはしていない。それどころか冒頭からギルガメシュを「すべてにおいて知恵ある者」³⁹⁾と紹介している。『ギルガメシュ叙事詩』におい

て読み解くべき重要な問題の一つは、ギルガメシュの知恵とウトナピシュティムの知恵はどのように違い、どのように関連するのかという点であると思われる。

『ギルガメシュ叙事詩』を「知恵文学」の一つととらえることは全く新しいわけではない。⁴⁰⁾しかし何を「知恵文学」とするかについては厳密に定められているわけでもない。一般的には『旧約聖書』のなかで「箴言」、「ヨブ記」、「コヘレトの言葉」などが「知恵文学」とされている。そしてそれらと類似する内容をもつ古代オリエントの作品をも「知恵文学」と呼ぶ慣例がある。⁴¹⁾また「知恵」とは何かについても包括的な論議はまだなされていない。⁴²⁾

古代オリエントの「知恵」や「知恵文学」について再考することは容易な作業ではない。なぜなら『旧約聖書』に含まれる文書よりも古いにもかかわらず、はるか後の近年になって世に知られるようになったことから、『旧約聖書』における概念をそのまま引き写したような論議に終始してしまいがちだからである。『ギルガメシュ叙事詩』における「知恵」について考察するためには、さしあたり原語と文脈に注意を払いながら、全体の構成、編者の意図などを問うことから始めなければならない。

人間は死すべき存在であり、どうして永遠に生きないかを語る神話は少なくない。⁴³⁾たとえばメソポタミアの『アダバ神話』によれば、知恵の神エアによって造られ、多くの知恵を与えられていたアダバであっても、天空神アヌが差し出した「命のパン」と「命の水」を、エアの助言に従って拒否したため、不死を得ることはできなかったということである。⁴⁴⁾このような神話と『ギルガメシュ叙事詩』が根本的に異なる点があるとしたら、死すべき運命を受け入れるギルガメシュと、人間であったが不死を得たウトナピシュティムを対峙させていることではないだろうか。そして洪水を経て永遠の命を得るに至った経緯をウトナピシュティムが「回想」として

ギルガメシュに語るという想定そのものが編者の新しい工夫であると思われる。そしてさらに両者ともに「知恵」があるとされていることに注目しなければならない。

VIII 二つの知恵

『ギルガメシュ叙事詩』は「人間は永遠の命を得られず、神になれない」、そして「人間は永遠の命を得て神になれる」という二つの命題を同時に提示していることになる。洪水を生き延びたウトナピシュティムが大いなる「知恵者」であることは、アトラ・ハシース（大いなる知恵者）の役割を受け継いでいることから明らかであるが、実際にウトナピシュティムが「アトラ・ハシース」の名で呼ばれている箇所がある。⁴⁵⁾また知恵の神エア（エンキ）との強い結びつきがある。

エアが「葦の垣根」と「レンガの壁」に呼びかけて「聞いて悟れ」⁴⁶⁾といわれたことを、ウトナピシュティムは自分への指示であることを悟って従う。それは決して容易なことではない。未曾有の災害が目前にせまっていることを予想できるはずもない段階で「家を壊し、船を作れ、持ち物を放棄し、命を求めよ、財産を厭い、命を生かせ」⁴⁷⁾とエアにいわれても、すぐに信じて従うことは常人には難しい。ちなみに船が完成すると、船の入り口を密閉するために地上に残る船大工プズル・エンリルには宮殿が与えられている。⁴⁸⁾間もなくすべてが粘土にかえってしまう大洪水が来るとは想像できず、地上の財産は魅力的である。

他方、神々の間でも「知恵」の有無が問題になっている。洪水を起こした神々について、エアは「どうして熟慮することなく洪水を起こしたのか」⁴⁹⁾と責めている。そして洪水後にウトナピシュティムが捧げた供物に神々は喜んでよってくるが、洪水を起こすことを決めたエンリルは来ては

ならないといわれている。⁵⁰⁾ 神々の間でも、知恵のある神とない神がいることになる。横暴な神、思慮のない神、知恵のない神は人間の供物を享受する資格がないということであろう。そしてエアになだめられたエンリルは、いわば自分よりも賢いウトナピシュティムに永遠の命を与えたのである。⁵¹⁾

ギルガメシュは「三分の二は神、三分の一は人間」とされながらも、永遠の命を求めて得られず、それでも人間としてある種の知恵と悟りを得たとされている。『ギルガメシュ叙事詩』の編者は冒頭でギルガメシュを「深淵を見た者」⁵²⁾ とし、前述したように「すべてにおいて知恵ある者」⁵³⁾ として紹介し、「彼は遙かな道のりを歩んできて疲れたが、安らぎを得た」と述べている。⁵⁴⁾ 求めた永遠の命を手に入れることなく、さらに若返りの草も失いながらウルクに帰還したギルガメシュが、その後も死の恐れを抱いたまま生きていたのではないことが冒頭部分で暗示されているのである。ギルガメシュのその後の具体的な業績としてはウルクの町を立派に築いたことが語られ、それによって優れた王とたたえられたことが語られている。

『ギルガメシュ叙事詩』ではエリアーデが言うようにイニシエーションの失敗が語られているのではない。「深淵を見た者」、すなわち人間には不可能とされた異次元への旅を成し遂げた者としてのギルガメシュはイニシエーションの成功者として描き出されているのである。すなわち死すべき人間であっても、労苦の末に救いとしての知恵を得ることが可能であることが描き出されている。この意味で『ギルガメシュ叙事詩』を「知恵文学」の一つとみなすことに賛成できる。

おわりに——「現代人の神話」

『ギルガメシュ叙事詩』のなかには、永遠の命をめぐる知恵の二重性がみえてくる。編者は元来別のものであったギルガメシュの物語と洪水神話を融合することによって、二人の異なる「知恵者」を描き出した。また同時に、「永遠の命」の「非神話化」を行っていると見ることができる。洪水について語り終えたウトナピシュティムがギルガメシュに語った「だが、今は、誰がお前のために神々を集わせようか」⁵⁵⁾という言葉に端的に表されているように、『ギルガメシュ叙事詩』の編者は「洪水神話」に「太古の神話」という位置づけを与え、『ギルガメシュ叙事詩』自体を「今」の、死すべき人間のための物語とした。4千年ほど前の物語であるが、有限な生を持つ人間のこの世における救いを得させる「知恵」のあり方を描き出したのである。

もう一度メソポタミアの「神話」とは何かを問うならば、ここにも「狭義の神話」と「広義の神話」があるといえるのではないだろうか。天地、人間を含めた万物の起原や創造を語る神話は、「太古に成立したとされる」⁵⁶⁾という限りにおいて「狭義の神話」である。そのなかには、神々の創造とともに大洪水による破壊を語る「洪水神話」も含まれる。しかし遠い昔の創造を語る神話であっても、実際に太古に成立したわけではない。バビロニアの創造神話『エヌマ・エリシュ』⁵⁷⁾がそうであるように、前2千年紀におけるバビロニアの勢力拡大ともなっており、その首都バビロンの主神マルドゥクの地位を神々の序列の最高位に引き上げる意図をもって書かれる「神話」もある。もっとも、今日まで伝わるすべての「神話」に多かれ少なかれ「政治的意図」を読み取ることは可能である。

他方「広義の神話」に属するものとしては、『ギルガメシュ叙事詩』のように、その時代に生きる人々に生きる力を与えるような物語がある。そ

れは4千年ほど前から「現代人」のための神話であったのであり、今後
も「現代人の神話」⁵⁸⁾であり続ける力を秘めている。このような要因は「知
恵文学」と共通するのかもしれない。またそれゆえにこそ狭義であっても
広義であっても神話は「時空を超えて人間に強い影響力を持つ物語」であ
り、どちらも現代人にとって意味を失っていない。あるいは現代人にも必
要であるために「神話」であり続けているともいえるであろう。

注

- 1) 本論の一部は、東洋英和女学院大学死生学研究所主催の連続講座・第5回(2005年1月29日)として行われた筆者の講演「永遠の命と知恵」のなかで発表された。なお2004年度から始まった本研究所の活動の中で筆者の研究班は「死生観における知恵と悟り」という研究テーマを掲げている。その一環として筆者自身は「古代メソポタミアの死生観における知恵と悟り」を当面の研究課題としている。
- 2) 月本 1996, p.6 参照。
- 3) 渡辺 2000, pp.22-23; 渡辺 1994, pp.382-389 参照。
- 4) 吉田・松村 1987, p.ii.
- 5) 渡辺 2003, p.172 参照。
- 6) 池上ほか編 2003; 島菌・鶴岡編 2004 参照。
- 7) 矢島 1969. なおこの訳の増補版が1978年に『古代オリエント集』(筑摩書房)に収録され、さらに1998年の文庫版『ギルガメシュ叙事詩』(筑摩書房)に再録された(矢島 1998)。
- 8) 月本 1996. なお第12書板は第11書板に直接続くものではなく、シュメール語の作品『ギルガメシュ、エンキドゥ、冥界』(Black *et al.* 2004, pp.31-40 参照)の後半部分をアッカド語に翻訳したものである。月本 1996, p.305 参照。
- 9) George 2003. この大著に先立ってジョージは『ギルガメシュ叙事詩』本文の英訳を出版した。George 1999.
- 10) シュメール語の『ギルガメシュとアッカ』、『ギルガメシュとフワワ』、『ギルガメシュ、エンキドゥ、天牛』、『ギルガメシュ、エンキドゥ、冥界』、『ギルガメシュの死』な

どの作品がアッカド語の『ギルガメシュ叙事詩』に編みこまれたことが認められる。月本 1996, pp.292-296 参照。なお、シュメール語では「ギルガメシュ」ではなく、「ビルガメシュ」と読まれる。またシュメール語の「フワワ」はアッカド語の「フンババ」に相当する。

- 11) *iškar*(ÉŠ.GĀR) ^dGĪŠ-*gīm-maš*: *šá pi-i* ^{md}*Sin*(30)-*le-qí-un-nin-ni* ^{Lu}x(x) x], George 2003, p.28.
- 12) 月本 1996, p.303; George 2003, pp.28-33 参照。ただしシン・レキ・ウニニが古バビロニア時代、あるいは中期バビロニア時代の人物である可能性を完全に否定することはできない。
- 13) 月本は、これまでに『ギルガメシュ叙事詩』の主題として論議されたものは①「死を前にした人間の生の問題」、②「友情」、③「太陽神(シャマシュ)信仰」、そして④「ギルガメシュの精神形成、もしくは精神遍歴」の四つにまとめられるという。月本 1996, pp.313-314。しかしこれら四つのうちの一つだけ、あるいはどれも同等の重みをもつとは考えられない。話の流れから考えれば、全編を通じて④の主題があり、特に後半には①の主題が中心になると見ることができよう。
- 14) それらの「主題」のほかにも『ギルガメシュ叙事詩』のなかには「文明と野蠻」「都市と荒野」などの対立項についての興味深い思索を読み取ること出来る。月本 1996, pp.339-346 参照。
- 15) エリアーデ 1991, p.88.
- 16) エリアーデ 1991, pp.87-88 参照。ギルガメシュが手に入れた若返り効果をもつ植物(草)については渡辺 2004b, pp.230-231 参照。
- 17) そのような神話の例については松村編 2004 参照。
- 18) エリアーデ 1991, p.85.
- 19) 「酌婦はギルガメシュに言った。『ギルガメシュよ、お前はどこへさまよいくのか。お前が捜し求める(永遠の)命をお前は見出せないであろう。神々が人間を創造した時に、人間には死を定め、(永遠の)命は自分たちの掌中に納めたのだ。ギルガメシュよ、お前の腹を満たしなさい。昼も夜も楽しみなさい。毎日、喜びをもちなさい。昼も夜も踊って遊びなさい。お前の衣を清潔にしなさい。お前の頭を洗い、水を浴びなさい。お前の手をつかむ子供を見守りなさい。妻がお前の腰で繰り返し喜びを得るように。これが[・・・]の生を生きる[死すべき人間の(?)定]めなのだ。』」([]内は本文欠損部分)、George 2003, pp.277-281; 月本 1996, pp.213-214 参照(古バビロニア版)。ただし古バビロニア版では「シドゥリ」の名の部分はおそらく欠損のため残っていない。別名をもつ可能性もあるが、単に「酌婦」(*sābitum*)と言われている。なお古バビロニア版の「シドゥリの忠告」の部分は『旧約聖書』の知恵文学の一つである「コヘレトの言葉」の9章7-9節と内容的にきわめて類似していることから、早くから注目された。Van der Toorn

- 2001 参照。この類似については稿を改めて論じたい。現段階では渡辺 2004a 参照。
- 20) 月本もその部分をシドゥリによる「現世的享楽主義の勧め」であると読み、標準版の編者はギルガメシュにそれを拒絶させたとしている。月本 1996, p.318 参照。しかしジョージは「シドゥリの忠告」を「知恵の教え」とし、標準版の編者、すなわちスイン・レキ・ウニンニがそれを「ウトナビシュティムの教え」として組み込んだと考えている。George 2003, p.32 参照。
- 21) 第 10 書板。George 2003, p.683; p.281; 月本 1996, p.121, p.215 参照。
- 22) シェルフ = クルーガー 1993。
- 23) [u]r-ha ru-uq-ta il-li-kam-ma a-ni-ih u šup-šu-uh, George 2003, pp.538-539, 9; 月本 1996, p.4, 7 行参照。
- 24) [mim-m]u-ú ⁴Giš-gim-maš ittallaku(DU.DU)^{ku} ka-lu mar-ša-a-ti, George 2003, pp.538-539, 28; 月本 1996, p.5, 26 行参照。
- 25) 月本 1996, pp.338-339。
- 26) 月本 1996, p.283; Dundes (ed.) 1988; Martínez/Luttikhuisen (eds.) 1998 参照。『ギルガメシュ叙事詩』の古バビロニア版にも中期バビロニア版にも、またその他の断片にも少なくとも現存している限りでは、洪水神話の痕跡は認められない。標準版において初めて洪水神話が取り入れられたと考える研究者もある (Landsberger 1960; 月本 1996, pp.302-303 参照)。しかし少なくとも古バビロニア版では、ウトナビシュティムを訪ねてゆくギルガメシュについて語る箇所が残存しているのであり、元来「洪水神話」も含まれていたことであろう。それに対して中期バビロニア版、また標準版よりも少し古いアッシリア版にははじめから「洪水神話」が含まれていない可能性が高い。George 2003, pp.31 参照。
- 27) Lambert/Millard 1969; 杉 1978 参照。
- 28) Black *et al.* 2004, pp.212-215; Civil 1969; 五味 1978 参照。なお「ジウドスラ (Zi-ud-sura)」(Black *et al.* 2004 による) の名はこれまで「ジウストラ (Zi-u-sudra)」と読まれることが多かった。
- 29) *i-ga-ru ši-ta-am-mi-a-an-ni ki-ki-šu šu-uš-ši-ri ka-la si-iq-ri-ia*, Lambert/Millard 1969, pp.88-89, 20-21. 『ギルガメシュ叙事詩』の対応部分では「葦の垣根よ、葦の垣根よ、レンガの壁よ、レンガの壁よ、葦の垣根よ、聞け。レンガの壁よ、悟れ」(George 2003, pp.704-705, 21-22; 月本 1996, p.137, 21-22 参照) と言われている。
- 30) アリエス 1990; 脇本 1997, pp.136-153 参照。
- 31) George 2003, pp.702-703, 7-10; 月本 1996, p.136, 7-10 行参照。
- 32) *i-na pa-na ^mUD-napišti(ZI) a-me-lu-tùm-ma e-nin-na-ma ^mUD-napišti(ZI) u sinništa(MUNUS)-šú lu-u e-mu-ú ki-ma ili(DINGIR.MEŠ) na-ši-ma lu-ú a-šib-ma ^mUD-napišti(ZI) ina ru-ú-qí ina pi-i nārāti(ÍD.MEŠ) uš-te-ši-bu-in-ni*, George

- 2003, pp.716-717, 203-206; 月本 1996, pp.148-149, 193-196 行参照。
- 33) *e-nin-na-ma ana ka-a-ša man-nu ilī(DINGIR.MEŠ) ú-pah-ha-rak-kúm-ma ba-la-ṭa šá tu-ba-'ú tu-ut-ta-a at-ta ga-na e ta-at-til 6 ur-ri ú 7 ma-ša-a-ti*, George 2003, pp.716-717, 207-209; 月本 1996, p.149, 197-199 行参照。
- 34) エリアーデ 1991, p.88.
- 35) George 2003, pp.718-719, 243-246; 月本 1996, p.151, 230-233 行参照。
- 36) たとえば現在まで千年以上続く、比叡山延暦寺の千日回峰行の中でも、「断食、断水、不眠、不臥」を9日間続ける「堂入り」の行を達成することは「大阿闍梨」となることへの重大なイニシエーションである。光永 2004 参照。
- 37) George 2003, pp.686-687, 135; 月本 1996, p.124, 23 参照。
- 38) George 2003, pp.668-671; 月本 1996, pp.107-109 (第9書板) 参照。
- 39) [x x x-t]i i-du-ú ka-la-mu ha-a[s-su], George 2003, pp.538-539, 4; cf. 2; 月本 1996, p.3, 4 行, 2 行参照。
- 40) George 2003, p.4 参照。
- 41) 勝村 2004 参照。
- 42) Lambert 1960 参照。古代オリエントと『旧約聖書』の「知恵」についてはたとえば Gammie/Perdue (eds.) 1990 参照。アッカド語文書のなかの「知恵」もしくは「知恵者」についての文献学的考察としては Sweet 1990 がある。
- 43) 松村編 2004 参照。
- 44) 渡辺 2004b 参照。
- 45) George 2003, pp.716-717, 197; 月本 1996, p.148, 187 行参照。
- 46) 注(29) 参照。
- 47) *ú-qur bīta(É) bi-ni^{GIS} eleppa(MÁ) muš-šir mešrām(NÍG.TUKU)-ma še-'i napšāti* (ZI.MEŠ), George 2003, pp.704-705, 24-26; 月本 1996, p.137, 24-26 行参照。
- 48) George 2003, pp.708-709, 95-96; 月本 1996, pp.141-142, 94-95 行参照。なお「プズル・エンリル」(^mpu-zu-ur-^dKUR.GAL)の名はこれまで「プズル・アムル」と読まれていた。
- 49) *ki-i ki-i la tam-ta-lik-ma a-bu-bu taš-k[un]*, George 2003, pp.714-715, 184; 月本 1996, p.147, 179 行参照。
- 50) George 2003, pp.714-715, 169; 月本 1996, p.146, 167 行参照。
- 51) George 2003, pp.716-717, 199-206; 月本 1996, pp.148-149, 189-196 行参照。メソポタミアの「洪水神話」における最高神の「変容」については渡辺 2005 参照。
- 52) [*ša naq-ba i-mu-ru*], George 2003, pp.538-539, 1; 月本 1996, pp.3, 1 行参照。
- 53) 注(39) 参照。
- 54) 注(23) 参照。
- 55) 注(33) 参照。

- 56) 注(4) 参照。
57) 渡辺 2000, pp.14-15 参照。
58) この場合の「現代人」は現在の現代人とは限らない。「現代の神話」をめぐる論議
については渡辺 2003 参照。

参考文献

- アリエス 1990: フィリップ・アリエス『死を前にした人間』(成瀬駒男訳) みすず書房。
エリアーデ 1991: ミルチア・エリアーデ『世界宗教史』I (荒木美智雄・中村恭子・
松村一男訳) 筑摩書房。
池上ほか編 2003: 池上良正・小田淑子・島蘭進・関一敏・鶴岡賀雄編『岩波講座 宗
教 1 宗教とはなにか』岩波書店。
勝村 2004: 勝村弘也「箴言解説」旧約聖書翻訳委員会訳『旧約聖書 XII ヨブ記 箴言』
岩波書店, pp.359-379。
五味 1978: 五味亨訳「洪水伝説」杉勇ほか訳『古代オリエント集』筑摩書房, pp.12-14。
シェルフ＝クルーガー 1993: リヴカー・シェルフ＝クルーガー『ギルガメシュの探求』
人文書院。
島蘭・鶴岡編 2004: 島蘭進・鶴岡賀雄編『〈宗教〉再考』ペリかん社。
杉 1978: 杉勇訳「アトラ・ハシース物語」杉勇ほか訳『古代オリエント集』筑摩書房,
pp.167-190。
月本 1996: 月本昭男訳『ギルガメシュ叙事詩』岩波書店。
松村編 2004: 松村一男編『生と死の神話』(宗教学論叢 9) リトン。
光永 2004: 光永覚道『千日回峰行』(増補新装) 春秋社。
矢島 1965: 矢島文夫『ギルガメシュ叙事詩』山本書店。
矢島 1998: 矢島文夫『ギルガメシュ叙事詩』筑摩書房(ちくま学芸文庫)。
吉田・松村 1987: 吉田敦彦・松村一男『神話学とは何か』有斐閣。
脇本 1997: 脇本平也『死の比較宗教学』岩波書店。
渡辺 1994: 渡辺和子「メソポタミアの神話」大林太良・伊藤清司・吉田敦彦・松
村一男編『世界神話事典』角川書店, pp.382-389 (=同書, 角川選書 375, 2005,
pp.363-370)。
渡辺 2000: 渡辺和子「古代オリエント」吉田敦彦編『世界の神話 101』新書館,
pp.12-31。

- 渡辺 2003: 渡辺和子「臓器移植と現代の神話」国際宗教研究所編『現代宗教 2003』東京堂出版, pp.168-182.
- 渡辺 2004a: 渡辺和子「伝承と比較 —メソポタミア宗教文書と『旧約聖書』」池上良正・小田淑子・島蘭進・末木文美士・関一敏・鶴岡賀雄編『岩波講座 宗教 3 宗教史の可能性』岩波書店, pp.55-80.
- 渡辺 2004b: 渡辺和子「生を与えるものと死を与えるもの—メソポタミアの場合」松村一男編『生と死の神話』(宗教史学論叢 9) リトン, pp.227-250.
- 渡辺 2005: 渡辺和子「メソポタミアの『洪水神話』」『東洋英和女学院大学 心理相談室紀要』8 (2004) pp.63-70.
- Black *et al.* 2004: J. Black/G. Cunningham/E. Robson/G. Zólyomi, *The Literature of Ancient Sumer*, Oxford.
- Buccellati 1981: G. Buccellati, "Wisdom and not: the Case of Mesopotamia," *Journal of American Society* 101, pp.35-47.
- Civil 1969: M. Civil, "The Sumerian Flood Story," *apud* Lambert/Millard 1969, pp.138-145.
- Dundes (ed.) 1988: A. Dundes (ed.), *The Flood Myth*, Berkeley.
- Gammie/Perdue (eds.) 1990: J. G. Gammie/L. G. Perdue (eds.), *The Sage in Israel and the Ancient Near East*, Winona Lake.
- George 1999: A. R. George, *The Epic of Gilgamesh. A New Translation*, Penguin Books, London.
- George 2003: A. R. George, *The Babylonian Gilgamesh Epic*, I-II, Oxford.
- Lambert/Millard 1969: W. G. Lambert/A. R. Millard, *Atra-hasīs: The Babylonian Story of the Flood*, Oxford.
- Landsberger 1960: B. Landsberger, "Einleitung in das Gilgameš-Epos," P. Garelli (ed.), *Gilgameš et sa légende*, Paris, pp.31-36.
- Martínez/Luttikhuisen (eds.) 1998: F. G. Martínez/G. P. Luttikhuisen (eds.), *Interpretations of the Flood*, Leiden.
- Sweet 1990: R. F. Sweet, "The Sage in Akkadian Literature: A Philological Study," J. G. Gammie/L. G. Perdue (eds.), *The Sage in Israel and the Ancient Near East*, Winona Lake 1990, pp.45-65.
- Van der Toorn 2001: K. van der Toorn, "Echoes of Gilgamesh in the Book of Qohelet? A Reassessment of the Intellectual of Qohelet," W. H. van Soldt (ed.), *Veenhof Anniversary Volume. Studies Presented to Klaas R. Veenhof of the Occasion of his Sixty-fifth Birthday*, Leiden, pp.503-514.

Eternal Life and Wisdom in *the Epic of Gilgamesh*

by Kazuko WATANABE

The standard version of *the Epic of Gilgamesh* composed in Akkadian in the second millennium BC narrates the adventures of Gilgamesh, the tyrannical ruler of Uruk, and his heroic quest for immortality. After Gilgamesh grieved over the death of his beloved friend Enkidu, he became frightened by the inevitability of death and he set out on a long journey to visit Ut-napishtim, the wise, who had survived the flood in ancient times and had been endowed with immortality by the gods. Ut-napishtim, tells Gilgamesh, how he survived the flood with the help of Ea, the god of wisdom. Then he says to Gilgamesh, “But now, who will bring the gods to assembly for you, so you can find the life you search for? Come, for six days and seven nights do not sleep!” (XI 207-209) Gilgamesh fails this challenge and realizes it is impossible for him to obtain eternal life. On the return journey, Gilgamesh manages to find the herb of rejuvenation, which Ut-napishtim had told him about. But a snake chances upon the herb, eats and casts off its skin, depriving of Gilgamesh the rejuvenation he had hoped for.

The present author does not agree with M. Eliade who argued that *the Epic of Gilgamesh* narrates the failed initiation of Gilgamesh due to his lack of wisdom. The editor of the Epic, possibly Šin-lēqi-unninni, must have intended to bring the immortal Ut-napishtim and the mortal Gilgamesh together by incorporating the flood myth into the Epic. The purpose of the editor seems to have been to declare that the times in which immortality could have been given to a human being were

long past.

At the beginning of the Epic, the editor introduced Gilgamesh as the extremely wise man who “came a distant road and was weary but was granted rest.” Although Gilgamesh had returned to Uruk in vain, it is suggested that he became wise and overcame the fear of death. The Epic narrates, in my view, a story of a successful initiation which has been appealing to the people until today.